



本当にあるのか「理想の病院」

ジャーナリスト
塩田芳享



②がん患者が生きがいを見つける「帯津三敬病院」

帯津医師は代替療法の第一人者

五十畳ほどもある道場で、約三十人の男女が氣功に興じている。一見すると、中高年の趣味のサークルのようにも見える。みな元氣そうで表情も明るいからだ。しかし、ここは病院に併設された道場である。埼玉県川越市にある帯津三敬病院は、日本で唯一の道場つきの病院だ。実は、ここに集まっている人たちは全員ががんと闘っている患者たちである。しかもその半数は現在も入院中だ。なかには、末期がんで死期を宣告されている人もいる。いま、日本では二人に一人ががんに罹り、三人に一人ががんで死ぬと言われている。今後、日本のがん医療はどのような方向を目指せばよいのか。その答えの一つがこの帯津三敬病院にある。ここはベッド数が九十九しかない小さな病院だが、この病院には全国各地からがん患者が集まってくるのだ。

と、二人の女性が演壇に立ち、オカリナの演奏に合わせ詩の朗読が始まった。オカリナを吹く五十代の山本敬子さん（仮名、以下患者の名前はすべて仮名）は、鼻に酸素の管を通しながらも、しっかりと一つ一つの音色を奏でている。その横で、宮沢賢治の詩を朗読するのは七十代の小笠原武子さんだ。一つ一つの言葉を噛み締めながら感情を込めて読み続ける。十五分の演目が終わると道場に万雷の拍手が沸き起こる。感極まった山本さんの目からは大粒の涙がこぼれた。

「実は、昨日の夜から急に体が痛くなって一睡もできなかったんです。正直、とてもみんなの前で演奏できるような状態ではなかった。でも、みんなに演奏すると約束したから、なんとか無理して来たんです。みんなに演奏を聴かせるなんて初めてだったけど、聴いてもらって本当に良かった。み

んなの拍手で、またたくさん元氣をもらいました」この道場で毎週一度開かれていた「患者会」は、がんの患者たちが自主的に開く集まりだ。その日に何をやるかは、患者たちが希望を出し合って決める。オカリナを吹いていた山本さんは、二年前に近くの大学病院で卵巣がんと大腸がんを宣告された。まだ五十歳を過ぎたばかりだった。「もともと病院嫌いだったので、我慢していたのが悪かったのか、わかったときには大腸がんの方はかなり進行していました」

医師と患者が「戦略会議」

先生がやっている代替療法のことを知ったんです」代替療法とは、手術・抗がん剤・放射線という現代の西洋医学以外の治療法全般をいう。漢方薬や鍼灸などの東洋医学をはじめ、アロマセラピー、食養生、呼吸法、氣功、太極拳など様々なものがある。この代替療法を二十四年前から始めた帯津良一医師（70）

きたのが、がん患者の「こころ」の問題だ。がん患者のこころを癒すことで治療の効果も上がるのではないかと。そう考える病院がある。

「それは高すぎる。中国の薬がそんなに高いわけがない。それは値段のつけ方がおかしいですよ」

帯津医師は自ら中国まで足を運び、漢方薬の買い付けをしている。そして、自分の目で見て信用できるものだけを患者に勧めているのだという。

は、日本の代替医療の第一人者と言われている。一口に代替療法といっても、そこには自由診療の治療が多いために値段のばらつきが大きいのが現状だ。漢方薬一つとっても、一カ月に数万円のものから数百万円ものまである。また、治療効果が科学的に立証されていないものも少なくない。医学知識の乏しい患者は、何を選べばいいのかわからない。そこで、この病院では、毎朝一時間、治療法の選択に悩む患者に帯津医師がアドバイザーする時間を作っている。この話し合いを、この病院では「戦略会議」と呼んでいる。がん患者が自分自身の「戦略」を持ってがんと闘う、それがこの病院のスタイルなのだ。

「長くて闘病を続けている患者さんにとって、お金の話はとても深刻な問題です。だから、それについて

前出の山本さんも戦略会議を体験し、びわのエキスを体に染みこませる「びわ温灸」や氣功、太極拳などの療法を自ら選んでいる。「帯津先生は色々な治療法を教えてください、けして強制はしないんです。選ぶのはあくまで私たち患者。それに、お金の心配までしてくるお医者さんは他にいませんよね」

帯津三敬病院に入院した当初は、氣功や太極拳で病状が好転していた山本さんだが、最近また体の調子が思わしくないと。体がよくなるかどうかは大事ですけど、それ以上にこの病院に来て、一日一日を充実して生きられることが本当に嬉しい。オカリナを吹いてみんなに聴いてもうなて、大学病院にいたころは考えもつかなかったことです。この病院での入院生活は大学病院とは何

この病院では患者の希望が第一

代替療法の世界はまさに玉石混濁だ。良いものもある一方で、儲け主義のものも少なくない。昨年には、「がんに効く」などとアグリクスやメシマコブを販売した会社の社長らが摘発される事件も起きた。

帯津医師はこう言う。②断定的にものを言う人は信用できない

帯津医師は、以下三点で判断するのだという。①値段が高いものは信用できない

帯津医師はこう言う。③商売だけを考えている人は信用できない

ベッド数99の小さな病院だ

十年前に胃がんと宣告されて手術し、その後の抗がん剤治療で激しい副作用を体験したという。さらに、がん

ある日の戦略会議にて。患者は五十代の女性。十

帯津医師は自ら中国まで足を運び、漢方薬の買い付けをしている。そして、自分の目で見て信用できるものだけを患者に勧めているのだという。

帯津三敬病院に入院した当初は、氣功や太極拳で病状が好転していた山本さんだが、最近また体の調子が思わしくないと。体がよくなるかどうかは大事ですけど、それ以上にこの病院に来て、一日一日を充実して生きられることが本当に嬉しい。オカリナを吹いてみんなに聴いてもうなて、大学病院にいたころは考えもつかなかったことです。この病院での入院生活は大学病院とは何

『いま、時代は“本物志向”へ』



抜いても生えて伸びる！
★自然すぎてバレない！
★日帰り手術で、翌日仕事可！
★女性にもビジネスにも模倣可能！
★一度に6000本の植毛も可能！
★移植毛の定着率ほぼ100%！
★人工植毛後の修正植毛もOK！

あらゆるタイプの髪に
毛の生え方・生え具合
を再現可能

元々ハゲにくい髪質を持つ頭部など
の髪を、毛根ごと生
きたまま移植するの
で、抜けても自然に再生して、健康
毛のヘアサイクルを繰り返します。

東洋人に最適
適、自毛ハ
ンドル植毛
…ダメージがない
超精密なチューラ
植毛。経験豊富な
熟練スタッフで最
高の結果をめざして、親身のご相談
をします。

生え際が
限りなくナ
チュラル
…従来の植毛法と
は違い、周辺の残
存する髪と違和感
のない豊富な密度
プロの理容師が見ても気付かないほ
ど自然な生え方が再現できます。激
しいスポーツや洗髪もOK。ヘアス
タイルも自由自在です。

段階植毛
も可能
…アナタの予算や
スケジュールに合
わせて少数ずつ
ステップアップ植毛していくことも
できます。

モニター募集中心！

Eメール相談受付中
shokumou-b@ag-k.org
ホームページ
http://www.jimou-shokumou.com/

大東 東京 横浜 大阪
相談無料 お断りなし
0120-73-1501
〒330-0802 埼玉県さいたま市大宮区宮前1-40-2 コニヤビル7F
ハガキに右の「資料請求券」を貼って、
自毛植毛専門センターへお申し込み下さい。

拒否した河合さんは死んだものと確信していたのだ。「頭にきましたけど、でもまだあみろって感じもしてたね笑」。だから、こう書いて送り返してやりました。「私は元氣いっぱいいでもちゃんと生きてます」って「余命二年」と宣告されてからすでに十二年。河合さんは今も週に一度、帯津三敬病院の気功の講習に通いながら元氣に生活している。代替医療の第一人者と言われる帯津医師は、最初から代替医療を行っていたわけではない。昭和三十六年に東大医学部を卒業した帯津医師が最初に就いたのは、がん専門の外科医だった。「当時は手術、手術に明け

暮れて、手術が終わった患者さんがその後どうなっているのかなど、考える余裕もなかったです」

西洋医学に欠けている視点

「自分が助けたと思っていた患者さんが実はちっとも治っていなかったという現実を知って愕然としました。手術や抗がん剤で治せる患者さんは決して多くないと感じました。そのとき、西洋医学の限界のようなのを感じました」

「西洋医学は、からだを治す、ことしか考えないで、患者さんの“心”を

「福島からわざわざ来るのはすごく大変なんですけど、どこを探しても他にはこんな病院がないんです。せめて一つの県に一つぐらい、こんな病院ができるようにすれば、日本のがん医療は劇的になると思うんですけどね」



道場では気功や太極拳を

週1回開かれる「患者会」

から何まで違います」六十代の田中義正さんは、六年前に食道にがんが見つかり、がんセンターで手術をした。完治したと思った矢先に今度は咽頭がんに。そして翌年は肝臓に転移。これまでがんセンター、大病院、民間病院などと転院し、手術・治療を繰り返してきたという。そして二年前に、この病院にきた。「この病院に来て最初に感じたのは、あまりにも他の病院と違うことでした。それまでの病院では、患者は医者や看護師の言うことをちゃんと守らなくては行けなかった。規制と強制だらけですよ。まあ、がん患者ですからも当然だと思っていましたけど、この病院では、ほとんどのことが患者の自由なんです」

余命宣告は絶対にしない

田中さんは昨年一月に他の病院で「余命一年」と宣告されている。「すごいショックでしたね。そのことも帯津先生に言いました。そしたら、返ってきたのが、『医者の方のことはあてにならないから、気にしないでいいですよ』という言葉でした」その宣告からすでに一年半以上が経過した。帯津医師は他の医師のよう

「余命宣告は根拠のある数字なのかもしれないけど、でも一〇〇%なんてありえませんが、私は、患者さんがそれだけしか生きたくないと思ってるんです。がんの患者さんにとって、一番大切なのは、生きる希望を持ち続けることだと私は思っているんです」

「余命宣告は、抗がん剤を

病院の中にある道場では、毎日時間を決めて太極拳や気功、呼吸法などの講習や帯津医師の講話などが開かれていて、入院患者は自由に参加できる。また、外出にも規制はなく、他の病院に診察に行つて帰りに買物をして帰ってくる患者もいるのだという。

「とにかく、この病院では患者の希望が第一なんです。治療法についても、他の病院なら医者は自分が考えている療法を押しつけようとする。患者が何を言っても

「主人には知らされていたんですが、私自身はがんの手術だとは知らなかったんです」

「それから漢方薬、気功、呼吸法など、あらゆる代替療法を試みた」